

(六) 幹事の人々

遠くしては南摩綱夫氏及び小南英策氏に依り、近くしては平岡良助、柴田美穂、濱貞男等の諸氏に依りて基礎を固められた我が柔道部の此の時代に於ける幹事は、前時代よりの濱貞男（二段）を始めとして、大島光四郎（初段）、須藤久藏、柴田一能及び増倉啓次郎の五氏であつた。その中増倉氏は都合ありて日々の出席覺束なかりし爲め、間もなく平野勝次郎氏が之に代つて幹事に就任せられた。

三 明治三十一年史

(一) 寒 稽 古

極寒三十日、東天未だ白まず、天地寂として聲なき時、朔風肌に徹するを物ともせず、嚴霜を踏んで道場に馳せ、火花を散らして演ずる壯快なる寒稽古に先づ新春の元氣を養ふは、我が柔道部年來の慣例である。此の年の寒稽古も一月十四日前四時より行はれ、皆勤者は昨年十六名であつたが、本年は五名を増して二十一名となつた。

稽古本數は、黒帶者では（四四三本）柴田一能、（三九七本）鳥津理左衛門、白帶者では（三四九本）中村愛作、（三四〇本）向山昌治、（三三七本）油井幸助、（三一八本）吉堀誠一、（二九二本）堀切善兵衛、（二八四本）井口爲熊、（二八三本）永野良造、（二七四本）越中谷吉次、（二五一本）福澤大四郎、（二四一本）木村徳太郎、（二三九本）黒田吉治、（二三七本）吉澤利次といふ順序であつた。

一月十七日には寒稽古皆勤證授與式を兼ねた茶話會が催された。師範山下先生先づ立つて、皆勤證を前記の勇士に授けられたる後、寒稽古が人の精神に及ぼす効果を説き、三十日間の苦闘は、將來社會に出でて一身を處する上に於て、最も必要な堅忍不拔の氣象を養成するものなりとて部員を激励せられ、次に濱貞男氏茶話會開會の趣旨を述べ、斯道の勉勵と相互の親交とを希望し、又堅實なる氣風養成の重んずべきことを高唱せられた。終つて、琵琶の彈奏、劍舞、吟詠及び他の餘興あり、頗る盛會であつた。

(二) 第八回 柔道大會

第八回柔道大會は明治三十二年三月二十日に開かれた。

記録に依つて當日の模様を見るに「この日天麗かにして、大會にはこよなき日和なりければ、午前八時といふに早くも斯道熱心の觀衆詰め掛け來りて、午前十時頃にはさしも廣き道場も立錐の地なく、集まる者無慮四百名と註されたり。正面には濱野部長卓を前にして嚴然と構へ、師範山下先生審判席に控へられたり。警視廳を始め各警察署、講道館、明治義會等の勇士の面々、皆これ一騎當千の豪の者、悠然として來賓席に居列びぬ。」とある。當時四十餘疊の道場がさしもに廣き道場であり、一騎當千の豪の者に塾の一二級の者が配せられたあたり、今より見れば殆ど隔世の感なくんばあらすである。斯くして午前九時より左の番組が順次に行はれた。(○は勝、×は引分)

(一) 二本勝負

(1) ○ 藤野藤太郎

(2) × 塚本和平

(3) 菊地一郎

(4) ○ 盛田保三

(5) ○ 田宮弘太郎

(6) ○ 木村徳太郎

(7) ○ 麻生茂

(五) ○ 多田源二郎
(一〇) × 内田廣亞

吉澤利次

藤野藤太郎

森本利三郎

越中谷吉次

神山七三郎

伊豫田源次郎

坪井市之助

長岡徳之助

後藤多喜藏

○ 金東完

○ 服部清吉

○ 武内吉次

○ 村澤在綱

(一九) ○ 渡邊萬次郎
(一〇) ○ 鈴木安四郎

鹽田爲三郎

加賀美豊三郎

○ 小泉

片田貞治

○ 井戸虎雄

野口善吾

○ 片田貞治

高松義郎

○ 長谷川菊之助

○ 柴山下師範

○ 須藤久貞男

(二六) ○ 玉川保
(一〇) ○ 渡邊萬次郎

永野良造

佐藤康太郎

和田寛治

○ 向山昌治

吉田兵藏

○ 平野重三

黒田吉治

○ 山崎内庄

竹内庄

○ 佐藤精一

○ 長谷川賢二郎

○ 長谷川悦次

○ 佐藤精一

○ 森川菊之助

○ 柴山下師範

○ 須藤久貞男

(二七) ○ 小川國一
(一九) ○ 渡邊萬次郎

早川要助

吉堀誠一

○ 西澤正敏

長谷川寅八

○ 松原良三

玉川鐵哉

○ 中島鐵哉

○ 玉川

○ 田邊雅介

相川俊二

○ 長谷川萬兵衛

○ 正午休憩

(II) 三之形

(I) 講道館投之形

(四) 二 本 勝 負

(講)は講道館、(警)は警視廳、(明)は明治義會、(北)は北辰館、(區名)は各警察署、無標は塾 (○は勝、×は引分)

(一) ○ 伊藤重郎

(七) × 清水伊勢吉

(一三) ○ 松岡 碣(講)

(二) ○ 川上義雄

(八) ○ 佐野甚之助

(一四) ○ 牧 佐太郎(赤坂)

(三) ○ 玉木和三郎

(九) ○ 田中信藏

(一五) ○ 濱 田 某(講)

(四) ○ 荒川雷太郎

(一〇) ○ 福澤三郎

(一六) ○ 山本武五郎(麻布)

(五) ○ 八木保三

(一一) ○ 島津理左衛門

(一七) ○ 奥野新吾(京橋)

(六) ○ 油井幸助

(一二) ○ 須田卓二

(一八) ○ 谷 鑛馬(京橋)

(七) × 中村愛作

(一三) ○ 内山之成

(一九) ○ 須藤久藏

(八) × 本多親宗

(一四) ○ 關 武熊(赤坂)

(二〇) ○ 久米正直(麻布)

(九) × 倉田敬三

(一五) ○ 諸遊慎吉

(二一) ○ 梨羽時介(明)

(五) 起倒流表裏之形

○ 小山下師範

(六) 體操第一種柔之形

○ 向山昌治 外七名

右了りて來賓を本塾大廣間に招じ、茶菓を饗した。

尙當日福澤先生は、病後の身にも拘らず、孫の壯吉さんを引伴れて午後より來賓席に臨まれ、大會の終了まで參觀せられたるは、一同の光榮とした所である。

(三) 月次勝負の一三

五月二十八日午後一時より月次勝負を催し、五十一番組の取組が順を追うて行はれた。斯道熱心の觀衆場に溢れて頗る盛況を呈した。此の日二人以上を投げ倒したる勝者を擧ぐれば、三品盛三郎（四人に勝）、盛田保三（二人）、向井某（三人）、野口善吾（一人）、井口爲熊（一人）、渡邊萬次郎（四人）、吉堀誠一（四人）、増岡次郎（三人）、佐野甚之助（三人）の諸氏であつた。

又次の月次勝負は十月十六日に開かれた。此の勝負は出席者頗る多かりし上に、午後五時より行はれた爲め、同日全部の番組を終るに至らず、夜十一時漸く七十一番目甲組最後の試合を以つて中止した。此の日最後に吉堀氏が大外刈を以て三人を仆し、四人目山崎慎と引分けたるは抜群の働きであつた。而して當日果さなかつた有級者の試合は、十一月二日午後六時より始められた。本多、増岡二氏の猛烈なる立合は、觀る者をして熱狂せしめ、田中氏が四人に打ち勝ちたる、之亦天晴れの手柄であつた。

茲には十月十六日の無級者勝負と、十一月一日の有級者勝負とを掲げて置く。

一、十月十六日無級者月次勝負

一本勝負

(一)	○	~	中村壯吉	渡邊昇
(二)	○	~	川島善太郎	吉(大外刈)
(三)	○	~	中村壯吉	中村壯吉(大外刈)
(四)	○	~	向山丹治	川島善太郎(腰投)
(五)	○	~	坂田正太郎	向山丹治(腰投)
(六)	x	~	成瀬義春	坂田正太郎(足拂)
(七)	○	~	深作正太郎	成瀬義春(絞)
(八)	○	~	青島卯市(負傷)	深作正太郎(絞)
(九)	○	~	佐伯英雄	青島卯市(負傷)
			佐伯英雄(引倒)	佐伯英雄(引倒)
			西川半次郎	佐伯英雄(引倒)
(一〇)	○	~	佐伯英雄(袈裟固)	佐伯英雄(袈裟固)
(一一)	○	~	玉木賢三	佐伯英雄(袈裟固)
(一二)	○	~	板橋善兵衛	玉木賢三
(一二)	○	~	板橋善兵衛	板橋善兵衛(絞)
(一三)	○	~	宮下秀一	板橋善兵衛(絞)
(一四)	○	~	小林則造	宮下秀一(胴締)
(一五)	○	~	鈴木太郎	小林則造(絞)
(一六)	○	~	渡邊一郎	鈴木太郎(内掛)
(一七)	○	~	鈴木太郎	渡邊一郎(袈裟固)
(一八)	○	~	森島芳藏	鈴木太郎(袈裟固)
(一九)	○	~	江波善三郎	森島芳藏(體落)
(二〇)	○	~	江波善三郎	江波善三郎(横掛)
(二一)	○	~	大塚莊亮	江波善三郎(横掛)
(二二)	x	~	大塚莊亮	大塚莊亮
(二三)	○	~	宮入正雄	大塚莊亮
(二四)	○	~	福森安一	宮入正雄
(二五)	○	~	稻村實章	福森安一
(二六)	x	~	福森安一	稻村實章
(二七)	○	~	油田篤太郎	福森安一
(二八)	○	~	田中彌八郎	油田篤太郎
(二九)	○	~	田中彌八郎	田中彌八郎(谷落)
(三〇)	○	~	松之助	田中彌八郎(谷落)
(三一)	x	~	松之助	松之助(鉤込足)
(三二)	○	~	環	松之助(鉤込足)

(二八) ○ 北川常四郎(引倒)

二 本勝負

(二九) ○ 北川常四郎
田宮弘太郎(横捨身)
(三〇) ○ 田宮弘太郎
菊地一郎

(二一) × 平賀恒次郎
加藤豊次郎(逆)

(二二) ○ 海江田平八郎(膝車)

(二三) ○ 海江田平八郎(膝車)

(二四) ○ 植村直木(大内刈)

(二五) ○ 根岸春重(釣込足)

(二六) ○ 麻生茂

(三六) ○ 福間茂(袈裟固)
秋山孝之輔

(三七) ○ 福間茂(隅返)
堀内貞治

(三八) ○ 福間茂
山岡長三

(三九) ○ 山岡長三
吉澤利次

(四〇) × 山岡長三
越中谷吉次

(四一) ○ 坪井市之助(大外刈返)

(四二) ○ 佐藤文彌(釣込足)

(四五) ○ 納代精二
森本利三郎(浮腰)
(四六) ○ 納代精二(小外刈)
森本利三郎(足拂)

(四七) ○ 納代精二
鹽田爲三郎(小外刈)

(四八) ○ 木村徳太郎(袈裟固)
盛田保三(足拂返)

(四九) ○ 盛田保三(裸絞)
多田源二郎(大外刈)

(五〇) ○ ~ 伊藤峯造	多田源二郎
(五一) ○ ~ 伊藤峯造	浩(膝車)
(五二) × ~ 小泉浩	(脚締) 大外刈
(五三) × ~ 黒田邊雅介	(脚締) 大外刈
(五四) ○ ~ 田吉治	吉川春治
(五六) ○ ~ 野口清吉	吉川春治
(五七) ○ ~ 濱野吉治	吉川春治
(五六) ○ ~ 後藤田吉治	吉川春治
(五八) ○ ~ 濱野吉治	吉川春治
(五九) ○ ~ 杉浦壽作	西澤正敏
(六〇) ○ ~ 向山昌治	保(製裘) 體落固
(六一) ○ ~ 荒川雷太郎	武内吉次
(六二) ○ ~ 向山昌治	保(製裘) 體落固
(六三) × ~ 井戸虎雄	吉治(大内刈)
(六四) ○ ~ 高島一貫	吉治(大内刈)
(六五) ○ ~ 伊藤重郎	吉治(大内刈)
(六六) ○ ~ 吉田兵藏	吉田兵藏
(六七) ○ ~ 安部保平	吉田兵藏
(六八) ○ ~ 吉堀誠一	吉田兵藏
(六九) ○ ~ 吉堀誠一	吉田兵藏
(七〇) × ~ 吉崎慎一	吉田兵藏

二、十一月二日有級者月次勝負

(一) ○○ 吉田 兵藏 (大外刈)	(七) ○ 本多 親宗 (釣込腰)	(三) ○○ 田中 信藏 (巴投)
(二) ○○ 吉田 部保 平 (大外刈)	(八) × 本多 親宗 (巴投)	(四) ○○ 佐野 基之 助 (腕挫)
(三) ○○ 吉田 兵藏 潔 (體落)	(九) ○○ 田中 信藏 (巴投)	(五) ○○ 島津 理左衛門 (巴投)
(四) × 吉 堀 誠 一 (大外刈)	(一〇) ○○ 田中 信藏 (巴投)	(六) ○○ 島津 理左衛門 (巴投)
(五) ○ 早 川 多 親 宗 (小外刈)	(一一) ○○ 倉田 敬 三 (大外刈返)	(七) ○○ 諸遊 慎吉 (背負投)
(六) ○○ 田 邊 貞 治 (大内刈)	(一二) ○○ 清水 伊勢 吉 (大外刈)	(八) ○○ 柴田 一能 (大外刈返)
	(一三) ○○ 田 中 信 藏 (巴投)	
	(一四) ○○ 金澤 冬三郎	

(四) 紅白勝負と送別會

十一月二十三日新嘗祭の佳節に、部員全體の紅白勝負が盛大に舉行せられた。從來の勝負は、大抵午後より始めて晩方迄に結末をつけたが、この頃に至りては部も漸次盛況に向つた爲め、午前八時より取組を開始しなければならなくなつた。此の日の兩軍の陣容と成績とは左の通りである。

◎ 大將紅組
諸遊慎吉

島津理左衛門

○ 佐野甚之助
倉田敬三

金澤冬三郎

本多親宗

早川要助

吉堀誠一

安部保平

吉堀誠一

小寺源吾

油井幸助

堀切善兵衛

(以上有級者)

井戸虎雄

川上義雄

杉浦壽作

高島一貫

平野重三

鹽田賢二郎

森川菊之助

伊豫田源次郎
濱田精藏

◎ 大將白組
柴田一能

内山之成

増岡次郎

大中圭介

今井政太郎

吉田兵藏

油井幸助

小寺源吾

吉堀誠一

安部保平

吉堀誠一

小寺源吾

油井幸助

堀切善兵衛

(以上有級者)

玉川保

向山昌治

荒川雷太郎

竹内吉次

井口爲熊

北宇角川植菅菖麻吉福越佐木田盛田

後藤多喜藏

服部清吉

黒田吉治

田鎖藤太郎

木村徳太郎

佐藤文彌

中谷

横久保新太

森本利三郎

坪井市之助

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

田

中

佐

木

吾

野口善吾

木浩太

小泉

森本利三郎

久保新太

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

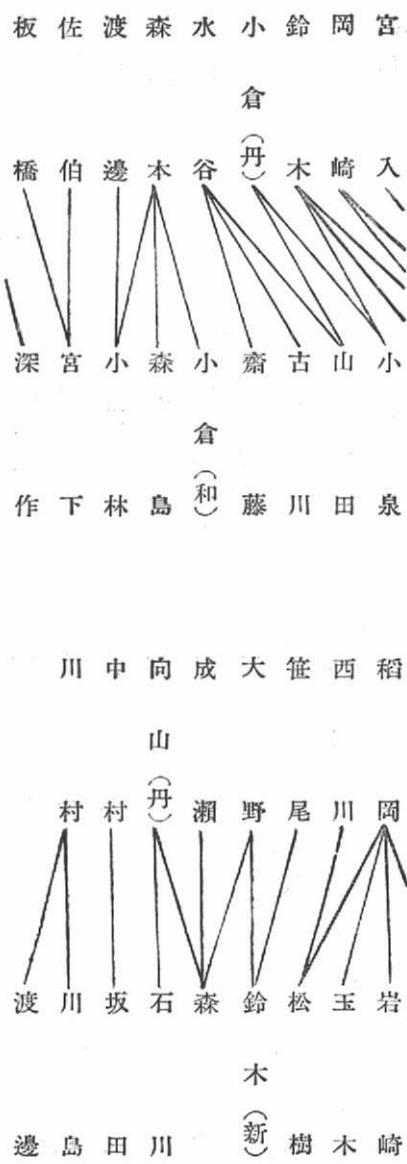
山

山

山

吾

原演品谷波藤賀宮山岡山山山



最初は紅軍優勢を占め、白軍色を失ひしが、白軍に山岡たる者あり、四人を投げ棄て、五人目の越中谷と引分けたる爲め、前表佐藤坪井兩氏に至りて、紅白兩軍互格の新手となつた。而かも戦績又々白軍に有利ならず、佐藤と服部の爲に見る間に四五名喰ひ込まれしが、白軍無級者の勇士向山と玉川腕を振ふはこゝぞとばかり、二人にて敵の七八名を薙ぎ倒し一驅して紅の牙城に迫らんとした。紅は漸く吉堀に至りて玉川を喰ひ止めたるも、力と頼む吉堀は忽ち堀切に投げられ、幸にして早川、本多の二勇士ありて紅軍の頽勢を挽回した。白軍は頼みに思ふ増岡を金澤に支へられ、無念遣る方なき折も折とて、内山は倉田に敗を取りたれば、旗色益々怪氣になつた。評判高き大中も難なく佐野に打破られ、こゝで紅軍は猶三將も残すも、白軍は唯一將の孤城を守るのみとなつた。すはこそ味方の一大事よと、白軍必死の聲援も其の甲斐なく、責任重くして心焦れる白將は、遂に佐野の左腰に倒れ、凱歌は勇ましく紅軍に起つた。

當日右勝負後、十二月に卒業すべき部員内山之成、今井宣二兩氏の送別茶話會が開かれた。出席者百十名。先づ幹事金

澤氏開會の辭を述べ、同柴田氏は部員繼代として祝辭を呈し、之に對して今井氏の答辭があつた。斯くて壽司、お菓子、果物等の饗應あり、各々歡を盡して散會せるは午後十時半であつた。

(五) 塾風刷新の急先鋒

國に國風あると同じく、學校にも亦其の學校特殊の校風なるものが存する。一國の勃興するは、其の國風の堅實なるに因るが如く、一校の興隆するも、亦其の校風の健全なるに基いてゐる。奢侈放逸時に國民の一部を侵し、遊惰文弱時に學生の一部を毒することあるも、國民の中核たり、學生の中堅たる者にして腐敗墮落することなれば、國風の振興、校風の肅正は期して待つべしである。

明治二十七、八年の日清戰役は、我國をして戰捷の威名を世界に成さしめたと共に、又一方に於ては國民を有頂天ならしめ、其極漸く人心を腐敗墮落せしめるに至つた。隨つて都門を望んで娼集し来る學生も、其廢穢的氣風に感染して放逸文弱に流れ、自ら知らざるが如きまでになつた。都下に漫々たる濁流は遂に三田山上を襲ひ、義塾幾千の學生も、相率んでその渦中に投げられんとした。時にこの弊風を慨し、敢然として肅正の聲を擧げたものは何人であつたか。

明治三十二年七月十日、福澤先生の邸に集つた一團の塾生があつた。先生の前に圓陣を作つた二十餘名、皆愛塾の念に燃ゆる健兒である。豫てより塾風の上に憂ふべき暗影を見たる福澤先生は、胸中を披いて一同に懇々と諭す所あつた。革新同盟團が組織され、「獨立自尊の精神を發揮し、躬行實踐以て塾風の革新を期す」との盟約が成り立つたのは、その席上に於てである。翌朝墨痕淋漓たる一大宣言が、塾の掲示場全面を覆ふ位の大きさで張出された。軟骨漢の間に早くも恐慌の色が現はれた。

團員は、塾全體に亘つて健兒を網羅したのであつたが、之が最初の幹事として擧げられた人々は、當時我が柔道部員中の錚々たる濱貞男、柴田一能、金澤冬三郎、小寺源吾の四氏であつた。其他の部員が本園の中堅であつたことは無論のことである。而して爾後數年間、三田山上の淨化する迄、此等の團員は相協力して、或は壇上より塾風の刷新を叫び、或は禍根掃蕩の實行的手段にも出でたのである。以つて如何に柔道部員が、全塾の名譽と責任とを双肩に荷ひ、事あれば則ち出て塾風擁護の範を天下に示し、事なれば則ち退いて道場に鐵腕を鍛へたかが想見されるであらう。これぞ我が部員の眞骨頭である。この意氣、この氣魄あつてこそ、そこに我が柔道部存立の意義あることを深く思はなければならぬ。

(六) 勃興氣運諸相

部の發展

柔道部の創立當時部員數十名に過ぎざりしが、本年の大會後には其の數二百名に達し、日々の出席者八、九十名にして日曜日とも稽古を怠らず、創立以來の發展を見るに至り、道場も爲に狹隘を感じる位にまでなつた。

入部手續の制定

從來出入任意なりしものを改めて、道場の神聖を保つと共に、柔道の修業は、單に四肢筋肉を發達せしむるのみに止まらず、剛毅、果敢、忍耐の精神を涵養し、禮節を重んじ、廉恥の念を磨く教育なりとの趣旨の下に、第一學期より新に入部手續の制を定め、又道場に入る時は部員に袴を着けさせることにした。

部員の稽古本數

柔道部が其の餘り廣からざる道場に於て如何に活況を呈せしかば、左記第一學期中に出席したる部員の人名と、其本數とが能く之を物語つてゐる。

(黒帶者)

二九三 須田 卓二	二七五 柴田 一能	二六九 濱 貞男	二六八 倉田 敬三	二六八 早川 要助
二六七 島津理左衛門	二五三 中村 愛作	二四八 金澤冬三郎	二一九 諸遊 憲吉	二二五 田中 信藏
一八七 福澤 三八	一六四 佐野 基之助	一四四 油井 幸助	一三一 山崎 慎一	一一〇 本多 親宗
八三 清水 伊勢吉	六五 今井 宣二	五五 田邊 貞治	五四 內山 之成	二三 増岡 次郎
黒帶者合計	二十名			

(白帶者)

二七三 吉堀 誠一	二二六 福澤 三八	一八四 和田 收藏	一六二 吉田 兵藏	一五五 後藤 多喜藏
一五三 向山 昌治	一五一 加藤 豊次郎	一四六 杉浦 壽作	一四四 神山 七三郎	一四〇 盛田 保三
一三六 伊藤 重郎	一三五 堀切 善兵衛	一二五 麻生 茂	一〇九 小泉 萬治	一〇五 井口 爲熊
一〇五 木村 德太郎	一〇五 鈴木 太郎	一〇四 植村 直木	一〇〇 中村 小陶治	一〇〇 西原 久
以下百〇三名略す				

白帶者合計 百二十三名

暑中の勵精

寒中の稽古は我が部の年中行事の一つであるが、暑中にも亦炎熱と戰つて、身心を練ることを望ましけれとて、此の夏同志の者相謀り、三伏の酷熱を物ともせず、小石川に合宿所を設けて講道館の暑中稽古に皆勤したる勇士があつた。この一夏の精勵によつて、諸士の力に一段の強味が加はつたことは勿論である。其芳名を掲ぐれば左の十一氏である。

濱 貞男 柴田 一能 諸遊 慎吉 島津理左衛門 金澤冬三郎 倉田 敬三
田中 信藏 中村 愛作 吉堀 誠一 杉浦 寿作 松岡 正男

帶色改正

從來部員の帶色は成年四級以上は黒色、幼年四級以上は紫色、其他は白色なりしを、九月より左の如く改正した。
(黒色)是有段者。(桺色)是有級者。(萌黃色)は甲組。(紫色)は幼年三級以上。(白色)は乙、丙組及び幼年二級以下。

道場の増築

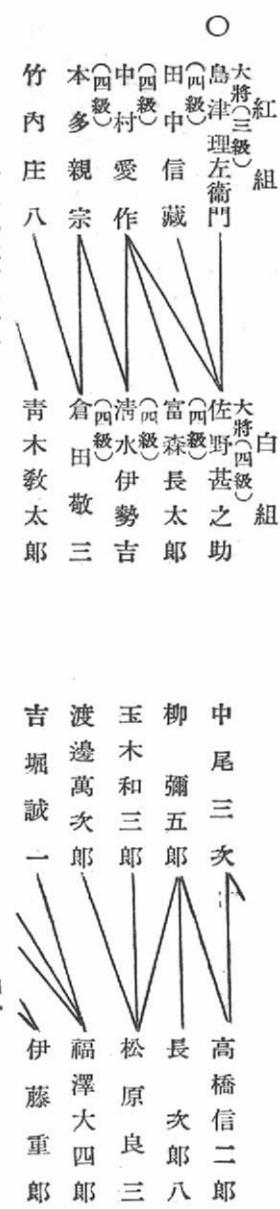
前述の如く部は空前の活氣ある發展を來して、道場の狭隘を告げたる上に、又新に入部する者日々相次ぎ、從來のまゝにては到底收容し切れざることとなつたので、其の秋々増築の運びとなり、四十餘疊の道場を、五十二疊に取替げることとした。而かも發展の勢尙止まず、其の冬遂に如何ともする能はずして、一時新人の入部を受附けざるまでになつた。

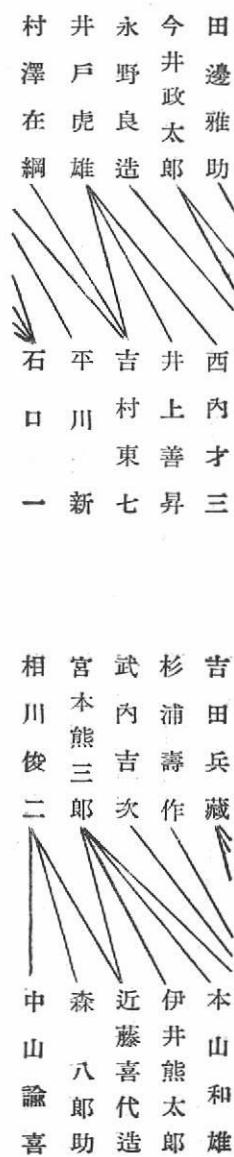
(七) 雜記

普通部四年對五年紅白勝負

明治三十二年頃には、未來の有段者も未だ鵬翼を張るに至らず、普通部に雌伏してゐる時代であつた。この年四月二日普通部四年級と五年級との間に行はれた紅白勝負は、現存の記録では本塾の紅白勝負として最初のものである。紅の四年級は島津理左衛門（三級）を大將として、田中信藏、中村愛作、本多親宗（皆四級）以下十六名の若武者之に隨ひ、白の五年級は佐野甚之助（四級）を大將とし、之に續くは富森長太郎、清水伊勢吉、倉田敬三（皆四級）以下同じく十六名の勇士であつた。その時の記事を見るに――

『演二段の審判の下に取組進んで、紅組無級者の筆頭竹内庄八、白組の倉田に喰ひ込みしが、倉田の巴投に脆くも投げ飛ばされ、倉田は本多得意の體落を幾度か免れしも、遂に之に討ち止めらる。清水は巴投に本多を倒して中村の四方固に敗れ、富森も續いて中村の爲に逆を取られたれば、白組は大將唯一人のみとなつた。すは油斷すな、敵には猶三人の勇將ありとて、白の同勢立ちとなり、聲を嗄して應援する中、佐野は中村を倒して、次なる田中をも物の見事に背負投げ、斯くて紅白兩將の取組とはなつた。兩龍壯劇を演じて戦ふこと一時間餘、初に白將七分の勝を取りしが、終に紅將の體落に果敢なき最後を遂ぐるに至つた。兩將の勝負が斯くも長時間に亘りて決せざりしに拘らず、引分とせざりしは、是非共雌雄を決せしめるといふ演審判の考に依つたのであつた。』





送別會

我が柔道部に在つて、久しく後進の指導に盡されたる初段大島光四郎、一級須藤久蔵、二級諸遊慎吉、三級福澤三八、四氏の送別會は、四月道場に於て開かれた。出席者六十名。席上濱野部長の演説に次いで、濱貞男氏、柴田一能氏の送別の辭あり、之に對して須藤、大島の二氏交々起つて答辭を述べらる。終つて宴を開き、餘興には詩吟あり劍舞あり、唱歌を歌ふ者あり、流行歌を怒鳴る者あり、各自藝を盡し歡を盡して散會せるは十一時頃であつた。

大島氏は前年卒業此度渡米せらるゝこととなり、其他の三氏は今回高等科を卒業せられたるのであるが、その中諸遊、福澤の兩氏は尙塾に留つて研究を続けることになつた。大島初段、須藤一級の去らるゝは、當時の柔道部としては歎からざる打撃であつた。

幹事の改選と濱貞男氏

昨年より今年にかけて、幹事大島、平野及び須藤の三氏相前後して高等科を卒業したるに依り、本年度に入りて行はれたる體育會各部幹事改選の結果、濱貞男、柴田一能、諸遊慎吉、金澤冬三郎及び島津理左衛門の五氏が當選せられた。即

ち諸遊、金澤、島津氏が新に加はつたのである。

然るに卓越せる人格と、熱心なる指導とを以て、多年部の爲に盡されたる濱貞男氏は、この年十二月目出度大學部を卒業する所なりしに、不幸一豎に犯され、醫師の勧むるまゝに、一時學業を離れて専ら靜養することとなり、十月下旬歸國の途に就きたるを以つて、倉田敬三氏代つて幹事の任に就かれた。

濱貞男氏は三十四年再び上京して養生園に入院し、一時経過良好なりしが、其後病勢遽に革まりて遂に復た起たざるに至つた。前途有望なる人物なりしに、實に惜むべきことであつた。

師弟の關係

世上の傾向を見るに、時代の進むに伴れ、我が國古來の美風たる師弟の關係漸次疎薄に流れ、徒らに形式の末に奔るの弊なきにあらずである。この中に在りて、我が塾は、福澤先生の大精神を中心として、三田山上に一個の大家庭を作り、學生各自の氣品を高め、理性の開發にいそしんでゐたのであるが、柔道部も亦其の大家庭内の一團であつて、師弟間の情誼親子の如く頗る濃かであつたのは、永く愛惜すべき特色と謂はなければならない。随つてこの和氣靄々の裡にこそ、日々の稽古にしろ、時々の研究會にしろ、又は茶話會にしろ、圓満に行はれて、部の發達が見られたのである。

この柔道部に於ける師弟間の關係は、單に道場内のみに限られたことではなく、それは家庭にまでも及んでゐた。部員の重立ちたる者は、時には隊を成して、山下師範邸を訪れることも數々であつた。

或時のことと書いた記録の一節を見るに――

『九月十七日幹事及び有級者十餘名、山下師範を麻布の邸に訪ぶ。師範は部員を見ること愛兒の如く、部員に接すること慈父の如し。師弟の間素より一定の禮義は存すれども、互に打ち解けて語り合ふ様、實の家庭も及ばざるが如し。午後

に至れば、山下夫人の手を盡されたる山海の珍味も、何の遠慮もあらばこそ、忽ちにして平げられ、飯櫃の底を叩いて物足らぬ顔せし大食家もありたり。夕刻迫る頃、一同謝して同邸を去る。』といふこともあつた。

寔に斯かる無遠慮は毎度のことであつた。柔道部員に取つて量の多きこそ、世人の所謂山海の珍味であり、山下夫人の手を煩はされたばた餅、鳥飯、竹の子飯などが、部員に取りては無上の御馳走であつた。而して斯かる場合、お互が珍妙なる隠藝に腹を抱へるのであつた。

運動會に於ける柔道體操

此年塾の春季運動會に於て、我が部員は柔道體操を行つて興趣を添へたことがある。其日幹事柴田氏の號令の下に、少年二十人、二人づゝ組となつて第一種體操之形を演じたのであつたが、練習の日淺かりしにも拘らず、一擧手一投足能く形を外れず、來觀者の大喝采を博した。

部員派遣

他校の大會に部員を派遣することは、明治三十年前後から始まつたことゝ思ふ。記録上派遣の記事を見るのは、左記を以つて最初とする。

○五月十三日第一高等學校へ

諸遊慎吉、田中信藏

○五月二十七日講道館府下各學校聯合試合へ

島津理左衛門、佐野甚之助、中村愛作、本多親宗

○六月三日明治義會中學校へ

須田卓二、清水伊勢吉、平野重三

○十一月十二日東京專門學校へ

諸遊慎吉、大中圭介

遠足會

部員八十名、十月八日午前八時集合地なる運動場を出發して飛鳥山に向ひ、二時頃迄丘上を飛び廻り、それより鶯谷古能花園に到り、名物のしるこ、壽司などに舌鼓を打ち、一日の清遊を盡して歸塾せるは八時頃であつた。

進級一括

本年度の進級者を一括して、茲に其の重なるものを掲ぐることとした。

○五月に催されたる月次勝負の結果

四級へ 増岡次郎、油井幸助、早川要助、山崎慎

三級へ 金澤冬三郎、佐野甚之助

二級へ 島津理左衛門

○又十月及び十一月の月次勝負の結果

幼年五級へ 向山昌治

四級へ 吉堀誠一、小寺源吾、吉田兵藏、安部保平、満田潔

三級へ 清水伊勢吉、倉田敬三、中村愛作、本多親宗、増岡次郎

二級へ 佐野甚之助、田中信藏

一級へ 柴田一能、諸遊慎吉

四 明治三十三年史

(一) 猛烈稀有の寒稽古

寒稽古は毎年のことであるが、本年の寒稽古は昨年來一時に勃興せる柔道熱の影響を受け、皆勤者の人數と云ひ、稽古の本數と云ひ、柔道部創立以來の事に屬するは無論のこと、後年の盛んなる時にも決して劣らざる活況を呈した。三十日間の道場は恰も鼎の沸くが如く、その力強き興隆氣分は左の表を以つても知られると思ふ。

皆勤者と其本數左の如し。

(有級者)

一、二三八 柴田 一能	一、一〇一 倉田 敬三	一、〇三七 吉堀 誠一	七〇〇 向山 昌治	六四七 吉田 兵藏
五八九 金澤冬三郎	四一三 田邊 貞治	三九〇 安部 保平	三四九 堀切善兵衛	二九五 本多 親宗
一二八 小寺 源吾	二二五 清水伊勢吉	一三一 増岡 次郎		

(無級者)